(3)　「委員会活動から４年生の学年飼育へ」
西東京私立保谷第二小学校教諭
山崎京子

ただいま紹介いただきました、西東京私立保谷第二小学校　山崎です。よろしくお願いいたします。

本校では、チャボとニワトリを、飼育委員活動を中心に飼っていました。それが、昨年度から４年生の学年飼育という形になり、獣医師さんとの連携で、とても意義のある教育活動を行っています。このことについての実践をお話しします。

獣医師さんとの連携を除けば、あとは、ごくありふれた公立小学校の一例ですので、参考にしていただけるのではないかと思います。お手元の資料にしたがって、話を進めさせていただきます。

まず、なぜ学年飼育に移行していったのかということについてお話しいたします。私どもの学校でも、飼育委員会がずっと存続していましたが、だんだん学級数が減ってきて、二十数名の児童で毎日の当番や土日や長期休業日を乗り切るということがたいへんになったということが理由の一つです。もう一つの理由は、中にはとても動物好きの児童もいたのですが、仕方なく飼育委員になった児童や、進んで飼育委員会の活動ができない児童がいたり、飼育委員会担当の先生に負担を追わせることが多くなったということです。このような理由から、本校では、４年生の学年飼育に切り替えることになりました。校長先生も子どもの理解が深い方で、獣医師さんとの連携で、校長室にモルモットを飼ったりされたこともあって、そこで子どもたちがとても癒されている実態がありました。そんなことから、６年間のうち、一度は小動物に触れる体験の大切さを私たちが認識し、さらに、発達段階もふまえた上で、今年から４年生の飼育に切り替えようということになりました。

私自身も、４月になって、４年生の担任発表で担任になるとわかったときに、職員みんなで決めた割には、子どもたちのことより、飼育をやらなければいけないという負担感を正直もちましたし、私が受け持っている間に死なせてはいけないという気持ちになりました。担任は３人だったんですが、皆同様の気持ちを抱いていたようです。ただ、主任の先生が、これまで飼育委員会を担当してくださっていた先生であるということが救いでした。

４年生になって、まず保護者会があったんですが、保護者の方々を目の前に、子どもたちの話をたくさんしなければいけないんですが、それよりも、４年生がこんな理由で飼育をすることになったので、これからいろいろ保護者の方々にも協力をいただかなければいけないという話の方が、後で考えてみると比重が多かったようです。それほど私たちも飼育をするということを大きく受け止めていました。保護者の方々もみなさん理解を示してくださって、「子どもたちのために私たちもがんばります」ということを言ってくださいました。

保護者の方々にも、飼育委員会の存続が危ぶまれるという話はあまりせずに、子どもたちのためになるという話を中心にいたしました。特に、夏期休業中や土曜日曜は、子どもたちだけで世話をさせるのが危ないという危惧もありまして、親子ボランティアという形をとったらどうかと考えて、保護者に依頼をしました。これは、エサをあげるということだけを目的にするのではなくて、家庭に帰って親子で飼育の話題を話し合うような機会をもってほしいとの投げかけをいたしました。最初はすごく不安で、自分の担任の子どもたちが担当する月は心配で、休日に出勤して飼育小屋を見回ったりとかもしましたが、結構予約がいっぱいになって、家族みんなできてくれたりとかしてくれて、不安も解消され、スタートとなりました。

資料の獣医師との連携というところを見てください。西東京市では、中川先生に特にお世話になっているんですが、獣医師さんとの連携がすごくよくて、これまで、獣医師さんにいろいろな点でお願いをしてきました。獣医師との連携の中にも、そこに１，２，３，４，５とあるように、いろいろな場面でサポートをしていただいているんですが、この写

真は導入の授業の様子です。そこで、４月当初にいろいろなお話をしてくださいますし、飼育の心得とか、人間と動物の違いとか、動物を飼育することによって、こんなふうに優しい人になれるというようなお話を、とてもわかりやすくしてくださいました。これが導入の場面です。この写真は、「おうちではどんな動物を飼っているの？」などと獣医師さんが質問して、子どもたちが手を挙げている様子です。

この写真は、ウサギのだっこの仕方を教えていただいているところです。「どきどきしていたね」とか、「鼻がぴくぴく動いていたね」とか、子どもたちはウサギに順番に触れながら、いろいろな感想を話していました。人に対して優しくなれるとか、思いやりをもてるようになるというようなお話がとても印象的だったと、感想に書いていました。

サポートの中で、鳥インフルエンザについてということがあるんですが、これはまた後ほどお話しいたします。

１組から順番に３組まで飼育当番が終わり、どのクラスでも子どもたちの変容がありました。先ほど計画的な飼育というお話もありましたが、これは、総合的な時間の中に、生命の尊重をテーマにした授業を位置づけたほうがいいのではないかということから、途中で予定を変更し、昨年度１年間、カリキュラムの中に位置づけて取り組んでみました。

この写真は私のクラスなんですが、１か月の実践が終了したところで、せっかく、子どもたちがいろいろなことに気がついているので、これを友だちや、授業参観の中でお父さんやお母さん方に伝えてみようということになりました。このようなめあてをもたせて、６月の新聞づくりに取り組もうということになりました。お手元の資料の１１ページにその様子がありますので、あとでご覧ください。

私は２組をもっていたんですが、１組の次が２組で、１組の当番が終わった連休明けにひよこが誕生したんです。そのときは１組の児童が担当だったんですが、１組の児童がこんなふうに書いています。

「日曜日、僕が行ってみると何かいつもと違って、何かピヨピヨという鳴き声がした。僕は『まさか』と思った。そして、小屋に入ってみると、そのまさかだった。すごく嬉しかった。ニワトリが鳴くとヒヨコもピヨピヨと鳴いていた。エサをニワトリにやるとまずヒヨコが食べていた。ヒヨコは生まれたばかりなのに親と同じエサを食べるのはすごくびっくりした。」と書いてありました。

私のクラスの担当は、このヒヨコの誕生がスタートだったので、早くもこのことだけで児童たちは飼育にはまってしまいまして、皆、一生懸命世話をしていました。

この写真は、１か月の飼育担当の時の経験をもとに、いろいろな出来事について話し合っているところです。また、新聞記事のアイデアをお互いに出し合って、新聞づくりに取り組んでいる様子です。そのなかで、ニワトリはミミズが大好きで、雛の２羽がミミズの引っ張り合いをして、それが綱引きみたいだったよ。とか、だったら、今度はミミズを２匹も３匹もあげればいいよね。など、子どもたちからはいろいろな体験談が出されました。また、ヒヨコはふわふわしていると思ったらほわほわしていたよ。などと言った児童もいました。そいうことも記事に書かれてあったんですが、これを国語の勉強にも取り入れて、黒板に「ふわふわ」、次に「ほわほわ」を買いて、「何か違うのかな？」と子どもたちに投げかけてみました。このときちょうど詩の勉強をしているときで、「ふわふわ」は、柔らかさは感じるんだけど、「ほわほわ」に

すると温度を感じるって言うんですね。今度は、「ほ」がつくような温度をかんじる言葉は何かある？と聞くと、「ほんわか」とか、「ホット」とか、そんなふうに、国語の授業に無理なく発展できたりしました。

そのほかにも、ウサギがチャボの隣にすんでいるんですが、ウサギが喧嘩したときに、その声の大きさにびっくりして、チャボのお父さんが子どもを小屋に入れたとか、入り口を守っていたとか、私たち教員が見ていないところも見ていたりしていることがわかりました。それから、地域の嶋田さんが近くを通って声をかけたりすると、「静かにして！」などと、まるで親の気持ちになったように、子どもたちは振る舞うようになりました。そのようなことも、先ほどお話しした授業の中でいろいろ出し合いながら、家の人に伝えてみようということにつながっていくわけです。

新聞記事の資料がないのが申し訳ないんですが、新聞の中に今お話ししたような児童の様子を取り入れています。新聞記事には、写真が入っていたり、作文が貼り付けてあったり、４コマ漫画が書いてあったり、川柳のようなものが書いてあったり、いろいろな表現を子どもたちはしています。たとえば、川柳のようなものでは、「飼育小屋、汚いけれど楽しいな」とか、「アレックス、ヒヨコを守るお父さん」とか、そんなごくありふれた内容なんですけれども、ありふれたことが、すごく素晴らしいという体験を、子どもたちは書き留めています。

本校は、東京都の人権尊重教育推進校に指定されていることもあって、公開授業などをして、みなさんに見ていただいたりもしました。やはり、具体的に体験したからこそ、言葉が出てきたり、絵がすんなり描けたり、家の人との会話がはずんだというようなことがありました。とても価値のある体験学習なんだと思いました。

そのような流れで、１学期２学期と過ぎていったわけですが、２学期の取り組みのお話をしたいと思います。お手元のレジュメの中で、３、「総合的な学習への位置づけ」というところを見てください。①は、動物の飼育の年間を通しての総合的な学習の時間全体の中での位置づけで、②が学習発表会です。そこには、「ゾウ列車よはしれ　台本、演技への取り組み」としか書いてないんですが、総合的な学習の時間の一貫として、学習発表会の時に劇をやったわけなんですけれども、学習発表会ですから、単に劇をやればいいというのではなくて、子どもたちの飼育体験をもとにして台本づくりなどから取り組みました。題名は、「ゾウ列車がやってきた」ですが、原作者の小出先生にも了解を得まして、子どもたちの飼育体験を台本のせりふの中にも入れてみました。子どもたちのせりふを少し紹介します。たとえば獣医師さんが登場する場面では、「いつも動物に何をしてあげたいかだけじゃなくて、何をしてほしいのか感じられるようになったら最高ね」とか、「動物を飼った人ほど優しくなれるでしょ？先生」とか、「動物の世話はたいへんだけど、自分が優しくなれる気がした」というようなせりふが、子どもたちの言葉として出てきました。それから、ゾウの飼育係がここでは出てくるんですけれども、そのせりふも子どもたちから募集したところ、次のようにまとめました。「ゾウはエサをいっぱい食べるから、こちらの方もいっぱいするよ。小屋に入ったらまず糞の様子を見る。健康状態が一目でわかるんだ。そうそう、ゾウがいいウンチをすると嬉しくなるんだ。おまけににおいだってすぐ慣れる。そんなふうに思えたら、飼育係も一人前だよね。」というようなせりふを、子どもたちの意見から取り入れて、教師の方で、学芸会の台本をつくったというわけです。

次にレジュメの「引き継ぎ集会」のところをご覧ください。先ほどの桑原先生のお話でも、引き継ぎが大事だということでしたが、私たちも３学期になると次の学年に引き継ごうかということで、やはり、引き継ぎ集会をしたらどうかということになりました。子どもたちの１年間の中で、伝えたいことはたくさんあるんですが、すべて自分たちが体験したことなので、項目が決まると子どもたちはその台本をすぐに書くことができました。ただお話しして伝えるだけではなくて、実際に演技しようとか、絵に描いて伝えようとか、実物のウサギを連れてきてやったらどうかなどという意見も出てきました。なぜかというと、先ほど劇のときにも、チャボが登場したんですね。劇の本番中に、とても演技力のあるチャボで、演技中にポトンと卵を産んだりしたんです。２日目も同じ劇をやるんですが、そのときには「卵を産んだ」というようなせりふをアドリブで入れたりしながら、劇をやりました。

この写真が、３学期の引き継ぎ集会の写真